

熱田同窓会報

ご挨拶



学校長 櫻井 梅弘

熱田高校の卒業生の皆さんにご挨拶の機会を得ましたことを大変光栄に存じます。熱田高校の先輩は創立以来幾多の立派な記録と輝く伝統を樹立されました。

その方々が今や社会の中心となってお活躍のご様子、誠に同慶の至りに存じ上げます。現在この学校に学ぶ我々もその伝統の上に安住することなく、創設当時の方々の熱意を我が心とし、更によき記録の樹立に邁進してまい所存です。

この機会に学校の近況について若干お伝え致します。母校熱田高校も設立以来28年目を迎え、校舎等は改修を要する時となりました。一昨年は本館(第1棟)の全面大改修があり、昨年は第4棟の4階積み上げと第3棟の外窓の改修が行なわれました。本年は、バスケットコートを2面持つ新しい体育館をテニスコートに新築することになりました。同窓会の方々には会合に、会議に母校をお使いいただけるものと存じます。

48年の学校群の導入以来、希望する高校への入学が制限され、伝統ある熱田高校のクラブも往年の輝きを若干失いましたが、吹奏楽部は県大会は勿論のこと、東海大会にも金賞の栄冠を与えられ、陸上部は東海大会、インターハイ等に出場し、熱田の名声を依然として高からしめています。大学進学についても昨年度の成果に甘んずることなく更に努力を重ねています。

28年前に激しく湧き出た熱田高校の泉は、一刻も休むことなき先生方や先輩の精進の結果、今や大きな清流となって、社会に大きく貢献しています。在校生も同窓会を通じ、先輩のよきご指導を期待しておりますので、何とぞ今後ともご指導、ご鞭撻の程お願い致します。



会長 佐々木元彦

同窓会会員1万名突破!

真夏の太陽が輝き、白い秀節となりました。山や海からの楽しいたよりが聞かれる今日このごろです、諸先生ならびに同窓会員の皆様におかれましてはますます

ご健勝にお過ごしのことと思います。

ひごろ本会につきまして種々のご指導たまわり、有難うございます。

さて本年3月1日の卒業式において、全日制25回生447名、定時制12回生48名を同窓会員としておむかえし本会も10,670名の大世帯に発展してまいりました。昭和31年3月、159名の少数で本校最初の卒業式を行った時を思い浮べると実に感無量です。私共先輩として、彼らの今後の健とうを心から祈る次第です。

ところで本年度は同窓会創立25周年の年にあたりますのでその記念式典を名古屋国際ホテルで実施することになりました。前回の昭和50年の記念式典の際も旧師の方々、同窓会員の皆様、多数のご参集をいただき盛大の内に式典を催すことができましたが、今回も前回以上の規模と内容で実施しようと役員一同準備しております。みなさんおさそいの上、是非多数の方々ご出席くださるようお願いいたします。

A君今度は是非出席して下さい。日頃の疲れなどを一遍に吹き飛ばそうではありませんか、50年の記念式典の時は、大阪のT君も、富山のS君も息せききって駆けつけてくれました。本当に、皆が楽しそうでした。学生の頃、お世話になったB先生も、ほんのりと顔を赤くして僕に話しかけてくれました。あのころの恐かった思い出が、まるで嘘のように吹きとんでしまいました。むしろそのことが懐しくさえ思われてきました。同窓会の会場を、そんな思い出と懐しさで盛りあげたいと思います。

『私の思い出』



三代校長 安積 正雄

熱田高校は創立25周年を迎えられ、同窓生の皆さんおめでとうございます。皆さん方の多くの方々は、すでに社会の第一線に立って、それぞれめざましいご

活躍をされ、あるいは健全なご家庭を築いておられるご様子でまことに心強く、嬉しく慶祝に堪えません。

私は昭和43年から4年間熱田高校にお世話になり、本校を最後として定年で退職をいたしました。それだけに本校や卒業生の皆さんにはいつそう深い愛着をいただいております。

初代積木校長先生、2代藤野校長先生には、すぐれたご見識とご高邁なご人格をもって、本校の校風の樹立あるいはその充実発展のため、創意をこらし、情熱を傾け、献身的な努力を重ねてこられました。また先生方生徒諸君も一丸となって“熱田高校づくり”に取り組み、卒業生の皆さん方の社会的活躍と相俟って、その努力は見事に開花し、熱田高校の名声はとみに高まり、高校教育に新しい展望を切り開いていかれました。私は三代目の校長として本校に赴任しましたが、何分浅学非才であり、力量、人徳ともに乏しく、ひたすら大過なきを期して努めてはきましたが“守成もまた難し”という実状でありました。この間のことについては熱田高校20周年の記念誌に書かせてもらったように記憶しております。当時は大学紛争のあおりを受け、高校にもその余波がおし寄せ昭和44年をピークとする疾風怒濤の激動の時代でありました。そのため、生徒の中には、指導拒否とか体制打破、卒業式紛碎、直接民主制などをかかげ、氣勢をあげるものがでてきて、これが対策については何かと苦慮をいたしました。先生方は、本校の伝統校風のもと共通理解に立って指導体制を固め、生徒の指導説得に当って下さったお蔭で大きな破綻もなく切り抜けることができホットしたことでした。これはハツカ的現象であったともいわれますが、当時を回想して感慨まことに無量であります。生徒の一部には、同調してハネ上った者もおりましたが、大部分の生徒は、平静で大局的判断を誤まらず、良識をもって善処してくれたことを今もなお感銘深く覚えております。そして“衆は賢なり”の感を深くしました。当時PTAの方々や同窓生の皆さん方から、温いご支援をいただいたことを今も感謝しておりま

す。また、在任中の思い出として、これまで懸案となっていた運動場西南隅の一角(空襲で廃墟化していた民有地)をようやく校地として確保できましたことは、全く感謝の至りであり、また大きな喜びでもありました。

さて、私は定年後奇しくも藤野先生と同じ中京大学に勤めることとなり、教職関係の講義を担当し、若い学生を相手に何とか頑張っております。もうあと2年足らずで第二の定年を迎えることとなります。

さいごにあたり、熱田高校同窓会の今後のご隆昌と同窓生皆さん方のいつそうのご活躍とご多幸を心からお祈り申し上げます。

同窓会創立25周年に寄せて

四代校長 日比野文一



熱田高校同窓会が創立25周年を迎え、待望の会報第2号が発行されるに際し、会員の皆さまに挨拶する機会を得ましたことを、心から喜びとするものであります。

熱田高校は、昭和28年4月、熱田の杜を東に望む現在地千年に呱呱の声を上げ、一時期学校紛争による多少の混乱が見られたものの、内に創設時の教育理念を掲げて、品格ある人間、気力ある生活人、健全なる日本人の育成に励むとともに、途中伊勢湾台風の災害による中断があったものの、外に校地、校舎の充実、整備に努め、20有余年を経たいま、名古屋学校群に属する、名実ともに県下の中堅高校としての地歩を固めました。そして同窓会員も、昭和31年卒業の第一回生159名から数えて、本年の卒業生まで、実に10,670名への飛躍的に増加し、それぞれよき家庭人、よき社会人、よき職業人として活躍しておられますことは、誠に慶賀の至りであります。

この間私は、昭和29年から昭和41年までと、昭和47年から昭和49年までの、前後二回14年間に亘って熱田高校に勤めさせていただきました。従って有縁の卒業生の方々は、全日制については、第一回生から第十三回生と、第十八回生から二十一回生まで、また定時制については、第四回生から第八回までの数千人に上り、熱田高校は、私の教員生活から切り離すことの出来ない存在になるわけでありました。

同窓生の皆さんの母校につながる思い出は、それぞれ千差万別かと思えます。しかし同じ校門をくぐり、同じ

教室に学び、同じグラウンドで鍛えたという共通の生活は、きっとお互いの心のつながりになっていると思います。また、母校を背景とする同窓の横と縦のつながりは、同窓生のひとりひとりにとって心の拠りどころとなり、また社会的活動の足掛りともなって、同窓生各人の人生に大いに貢献していることは、疑う余地がありません。さらに、昨今学歴社会が問題にされていますが、ひとはこの学校の出身であるかで評価されるとともに、学校は卒業生を通して評価され、批判されるのが、現実の姿であります。

同窓会が創立25周年を迎えられるに当り、母校と同窓会、同窓会と同窓生の関係について、認識を新たにされますことを期待して止みません。

同窓会と同窓生各位の一層のご健闘とご発展を祈り、ご挨拶といたします。

卒業生へ

元教諭 小鹿 信由

十六年間熱田高校に勤めさせて戴き退職してもう百日余り過ぎました。佐屋・新川・名古屋市立第二高女・津島高女・津島高校・熱田高校と点々と歩いて四十五年間の教員生活・その三分の一の長い間本校に御厄介になりました。

省みると熱田高校の着任は一九六〇年でした。その頃から経済の高度成長期には入り、その間長く就職の係を勤めさせて貰い、又好きな庭球の顧問、ほんとうに幸せでした。

生活の流れが変わって第二の人生の生き方を模索中ですが、今は農業やトレーニングをして体を鍛えようと思っています。いちご、なすなどの野菜を栽培し、大豆は鳩が種を食べてしまうので、直接に蒔かないで苗にして三百坪、三日もかかって植えました。蛋白質の栄養をとるために……。

西瓜の花が一ヶ月余りで人間の頭ほどに急に育つのにびっくり、栽培してはじめて自然の神秘を感じました。

今も毎朝五時半ごろ4km程の田園をトレーニングしています、お蔭で体力は四十五才だそうです。

今年七月八日卒業生に載いたズボンに身をつけて午後一時ごろ家(美和町)を出発、二時半東海大橋、三時半揖斐川を渡り、三十分間休憩し、養老山脈の地理的景観(茶・桑畑・水田などの扇状地)を考察しながら六時ごろ養老の滝につき、帰りは電車で、家に着いたのは九時ごろ、へとへとでした。

こうして退職後も健康の有難みを味っています。これから海外旅行、スポーツなどして人生を明るく生きようと思っています。体力トレーニングは食事や睡眠と同じように生涯を通じて日常化されることが必要であるといわれています。

高度成長期の生徒諸君も今は社会の中堅として御活躍中と思います。

会員の皆さま、御世話になった諸先生や御父兄の益々御発展と御多幸を心からお祈りしています。

「回顧」

山田 浩

今年は、同窓会発足25周年大会を催されると聞き、慶賀に堪えません。

かつて本校に学ばれた方々が、今は、親の立場でPTAのために尽力されていたり、教員として後輩の指導にあたっておられたりする様子を拝見するにつけて、時の経過の速いのに無量の感慨を覚えます。卒業生の誰れかれ、マスコミにのって話題を提供しているA君B君、風の便りで消息を知るE君F君G君など、今年の秋には何人の人に会うことが出来るのかと、今から楽しみにしています。

私は - といえば、20年1日のごとく同じ道を通いつづけています。何かの節目に、ふと立ち止まるとは、後ろを見かえり前を望んで、若干の感想を持つのですが、考えてみれば、はかないわたくし事に過ぎないものようです。

そんな私事を綴っても興ざめするばかりですから、ここには着任後の記憶すべき出来事を年譜ふうにして話の種とし、かつは編集の皆さんに対する私の責めをふさぎたいと思います。

34年

- 9・26 伊勢湾台風襲来。避難者殺到。午後10時45分、水位最高、1棟床上40cm。
- 9・27 避難者1078名。人心いささか殺気立つ。
- 9・28 登校生徒約3分ノ1。復旧作業。
- 9・29 同上
- 9・30 赤痢と思われる患者が出る。生徒の校内立ち入り禁止。当分休校。
- 10・2 職員5班に分かれ、不明生徒の消息をさぐる(1年・村松勝代さん、罹災死亡)。
- 10・10 一応授業再開。熱田郵便局・名港・松蔭高校などへ割り当てで救援活動に行く。

緑 あ り

教諭 八谷 芳樹

- 36年 生徒心得より長髪禁止条項を削除する。
 37年 10周年記念式典。
 38年 新教育課程実施。この年より文化祭2日間。交通事情により長距離走大会を中止する。
 39年 補習計画を縮小し、平常補習週3回授業後、夏季補習最高20日間などの方針を決める。
 40年 生徒数最高となる(1703)名。優秀賞・功労賞を廃し、皆勤賞のみ存続することとする。
 41年 教育相談室開設。
 42年 プール竣工。
 43年 高校入試9教科より5教科に変更される。
 44年 10月ごろより高校生運動激化する。
 45年 耐寒訓練自由参加となる。男子の防寒コート着用を認める。
 46年 皆勤賞も廃止。
 47年 20周年記念。光化学スモッグの情報伝達方法決まる。

この辺でやめますが、これらの一つ一つがその後の本校のあゆみに影響を与えていることを思い、感慨なきを得ません。群制度発足後は、学校の変化も一段と急になったように感じられます。

その間を貫く一本の「棒のごときもの」は何かを思いあぐねつつ、答えの出ないまま拙文を閉じます。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



大盛況だった20周年記念



高校を語る時、念頭に浮かぶのは二つの学校である。自分が育ててもらった母校と、教員として育ててもらった「熱田」とである。いつのまにか、運動場にしっかり根をおろしている一本の楠や、講堂の堂章の由来を、受け売りで生徒に語りかけ、母校と同じ愛着を覚えるようになった。転任してこられた先生方から「緑の多い学校」「伝統ある学校」と言われるにつけ、「永くなくなったなあ」と感じることもある。私の赴任した頃の熱田はまだ新設校の匂いがどこもなく残っていたし、熱田では緑は育たないとまで言われていたからだ。同じ学校に永くいるとマンネリ化してしまい、時として進取の精神が乏しくなることがある。

そんな中で、結婚式、クラス会などで会ったり、時折訪ねてくれる卒業生など多くの人たちと語りあう機会が多い。社会で活躍している人たち、目を輝かせて仕事の内容を伝えてくれる人たち、悩みごとをもって相談にきてくれる人たちなどさまざまである。とりわけ在学中にはなかなか理解してもらえなかった私の考えなどを理解してもらえた時など、まさに教師冥利に尽きるものである。同時に、あらゆる分野で活躍中のかつての教え子から今度は教えられることも多く、時折、「世間知らず」を反省させられることもある。

「教育は人だ」と言われる。学校で一番大切なものは校舎でも設備でもなく、青春の一時期をどんな先生と、どんな友とめぐりあえたかということであろう。私は若い時期、熱田ですごくことができたことを幸せだと思っている。熱田を創り上げてきた個性あふれる、それでいて和気あいあいとした先生方とそこに集い、学ぶ若者と知りあえたからである。この貴重な体験を大切にしていきたいと思っている。人と人との出会いほど美しく貴いものはないだろうから。この出会いから自然と「やる気」がおこってくるのではないだろうか。いくら立派な校長や先生がいても、生徒に「やる気」がなければ先生や学校の役目などほんの爪の垢ほどでしかないだろう。

真の意味で伝統のある立派な学校を創っていくのは生徒であり、卒業生であろう。在校生と卒業生が連帯の絆で結ばれてこそ「熱田高校」が充実するのではないか。今こそ改めて創学の精神を想起し、「気力ある熱田」を育てるために母校の発展に一層、努力されるとともに、側面から一層の援助をさしのべて下さるよう念じ、僥倖ながら古参教員の弁とする。最後に、卒業生諸君のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

現在までの卒業生数

全 日 制		定 時 制	
回生(年度卒)	人数	回生(年度卒)	人数
1 (31)	159	1 (44)	47
2 (32)	163	2 (45)	40
3 (33)	258	3 (46)	44
4 (34)	249	4 (47)	60
5 (35)	274	5 (48)	58
6 (36)	272	6 (49)	49
7 (37)	386	7 (50)	52
8 (38)	387	8 (51)	50
9 (39)	365	9 (52)	41
10 (40)	384	10 (53)	38
11 (41)	547	11 (54)	54
12 (42)	598	12 (55)	48
13 (43)	549		
14 (44)	522		
15 (45)	491		
16 (46)	467		
17 (47)	451		
18 (48)	444		
19 (49)	447		
20 (50)	448		
21 (51)	451		
22 (52)	447		
23 (53)	446		
24 (54)	446		
25 (55)	447		
計	10098	計	572

静岡大	3 (2)	1 (1)	南山大	42 (4)	19 (1)
名工大	7 (4)	4 (1)	愛工大	15 (3)	18 (1)
愛教大	9 (4)	13 (5)	日本橋大	6 (2)	14 (4)
岐阜大	11 (2)	10 (2)	中部工大	9 (1)	9
滋賀大	3 (2)		金城院大	4	6
山形大	2 (2)		淑徳大	8 (1)	9
岩手大	1 (1)	1 (1)	相山女大	5	10
愛媛大	2 (1)		同志社大	6 (6)	7 (7)
山梨大		3 (2)	関西大	9 (2)	8 (8)
高崎経大	1 (1)	1	県女短	6	12
横浜市大	1	1 (1)	名市短	2	5
都留文大	1 (1)	2	名保短	9	13 (1)
金沢大		2 (2)	淑徳短	16	20
名市大	9 (6)	2 (1)	金城短	8	5
県立芸大		2 (1)	相山短	8	5
県立大	4	3 (1)	名短	13	19 (1)

熱高の地因=血因

定時制教諭 加藤 一夫

光陰矢の如しとか、私が本校に転任して早や十三年目になります。二年程前より定時制に陶芸部ができて、二十数年前、瀬戸窯業高校勤務時代に聞きかじった怪しげな見聞を頼りに、その顧問をしておりますが、土の形の中にその時々自分の心があらわれて、むつかしくもあり楽しくもあります。

徹夜の焼成作業も何んのその、千二百度の火炎の中で生徒たちの苦心の作品がどんなになって出てくるかと心おどらせ楽しいばかりでございます。

しかし誰も居ない静まりかえった学校内で唯一人夜を過ごす気分は又、妙なるものでもあります。

あれは確か三月の休み中の窯たき作業の折でした。昼過ぎから火を燃やし続けて温度も順調に上がり、その夜も深々とふけて午前二時頃愈々千百度あたりの攻め(窯たき用語)もあと一息と、職員室に戻ってガス圧や温度を記録していたときの事です。突如言うに言われぬざわめき、得体の知れぬ気配がちょうど風が吹いてくるように近づいて、と言っても何一つ音の聞えぬ静寂の中で、全身鳥肌立つ思いに押しつつまれ身体が硬直して了ったことがございます。

聞くところによれば、昭和二十年六月のアメリカ空軍の空襲でこのあたりの工場一帯(今の熱高附近)はわずか十分程の間に死者二千百四十五名、重軽傷者三千名の一大修羅場と化し、爆弾で吹きちぎられた手や足はあたりを散乱し、今まさに息絶えんとする人々がその末後の

〈進学状況報告〉 激化の大学入試

()内は浪人の内数

大学名	54年度	55年度	大学名	54年度	55年度
北大		3 (3)	慶応大	5 (5)	3 (2)
京北大	1 (1)	2 (2)	中央大	1 (1)	7 (6)
神戸大	2 (2)		日本大	10 (3)	11 (7)
金沢大	1 (1)	2 (1)	法政大	2 (2)	3 (2)
名大	7 (3)	7 (4)	明治大	4 (2)	11 (8)
三重大	5 (2)	6 (2)	立教大	1 (1)	2 (2)
広島大		2 (1)	早大	8 (8)	12 (1)
京農大	1 (1)	1	東京理大	3 (2)	11 (9)
富山大		2	名城大	42 (10)	46 (5)
信州大	6 (3)	9 (4)	愛大	60 (2)	47 (1)

水を求めて、今の熱高あたりにあった湿地帯の池に集ったとのこと。土地の人は今なお当時のことを血の池地獄と言い伝えとか。

今や戦後三十余年、その血の池地獄の修羅場は土がかぶせられて運動場となり、何も知らぬ生徒たちはサッカーにそしてソフトボールにと、その上を毎日走り廻っております。平和と言えは正に平和な毎日の状態でございます。

あの夜の只ならぬ異様なざわめきの気配は一体何であったのでしょうか。

かつての時代に青年時代を送った私が今教師としてこの地に立つめぐり合せに深く思いをいたすものでございます。あと二ヶ月もすればむごい戦争も終り、平和な時代を迎える筈であった人々の無念の憶いに、心から会心の心を送らせて頂くものです。それでないと、その果されざる無念の憶いに、おどらされて、益々生徒の気持ちがすさんでくるのではないのでしょうか。

合掌

ほんの少しの体験から

定時制教諭 三木 裕文

本校に勤務して三年目、しかも教師となってもわずか三年目である私がお話しすることはあまりありませんが、二年半あまりの教師生活の感想を少し書いてみたいと思います。

まず、定時制高校に勤務して一番強く感じたことは、「人は変わる」ということです。入学してきた生徒が二年、三年、四年となるに従ってどんどん変わっていきます。まだこの学校に勤務して二年半ほどですから四年間の変化を見たわけではありませんが、確かに二年、三年……いや一年、半年の間でも彼らは変わっていきます。あいさつひとつ満足にできなかった子ができるようになったり、クラスの中で迷惑がられていた子がクラスを中心になったり、いろいろと変わっていきます。教師たちの指導はもちろんですが、変わっていく子どもたちには自分自身の中に変えようという意志が少しでもあるということです。それは毎日の学校生活の中で生まれてくるものです。毎日きちんと学校に出てくる子どもたちは、強い意志を持った子であるというわけではありません。むしろ、自分自身の弱さを自覚している子であると思います。自分が強い人間だと思っている子、少々休んでも後からまじめにやろうと思っている子は永続きしません。そういった子どもたちは途中で脱落していくことが多いようです。

途中でいろいろなことがあったとしても、卒業していった子どもたちはやはり四年間で何かを学び、変わっていったと思います。自分自身の弱さの自覚、がまん強さ、他人への思いやり等、何かを得て卒業したのだと思います。新入生を見ていつも感じるの一人一人が「自分が一番偉いのだ」という顔をしていることです。それが四年たつて卒業していく時には、自分の考えが常に正しいとは限らない、自分が間違っていることもあるということを知って、卒業して行って欲しいと思います。そして社会に出て、さらに他人の考えを聞き、自分の考えもはっきりと主張できる人間になってもらいたいと思います。

多くの脱落者が出る中で定時制高校を立派に卒業したということは、それだけでそれはその人にとって大きな財産、自信になるはずですが、しかしそれを誇らないで、「内に秘めたる力」として社会で活躍して欲しいと思います。

記録への挑戦

陸上部 3年 久野 幸子

私は、名南地区予選、県予選、東海予選を通過し、8月1日から愛媛県で行なわれる全国高等学校総合体育大会(インターハイ)に400Mで参加します。

陸上を始めて、まだ2年と3カ月ぐらいますが、最初から速かったわけではなく、むしろ部員の中では遅い方でした。

1年の時は、まず、基礎体力と走るときのフォームを身につけることで精一杯。秋の新人戦の名南地区予選、最も小さい大会ですが、そのまた予選、400Mのゴール1m手前でころんでしまったのです。

傷跡が残るぐらい、ひどいころびようでした。

来年はこんなみじめな思いはしたくないと、冬のきびしい練習にたえました。

そして、2年の春 インターハイ名南地区予選。

400Mで64秒6 第5位、県予選に進出、県予選では63秒5 第7位。

あと1人で東海予選という非常に悔しい結果でした。

夏休みを経て、秋の新人戦、学校祭の準備等と重なって時間がない上に、応援の練習のため、練習場所が狭くなり、思うように練習はできませんでした。

けれど、名南地区では100M 200M 400M 4×100Mリレー すべて県予選に進出。

県では100Mと200Mは第3位、400Mは60秒1で第1位、リレーは準決出場で、うれしいという気持ち

と同時に、次の春は東海大会に行こう という気持ちもわいてきました。

そしてまたきびしい冬の練習。ここで負けてはいけな
いと自分に言いきかせ、頑張り、いよいよ春。

インターハイの予選が始まりました。名南では 100M
12秒9 第3位 200M 27秒1 第2位 400M
63秒3 第2位 4×100Mリレー 52秒4 第4位
県では、100M 13秒0 第5位 200M 26秒5
第4位 400M 60秒1 第2位、4×100Mリレ
ー準決出場、100M、200M、400Mの3種目で
東海大会に出場することができました。

東海は、6月20日～22日 岐阜で行なわれました。

私にとって初めてのことで、すこし緊張しましたが、ス
タートブロックについて、用意ということばをきいた時
には、もうだいぶ落ちついて、いつもどおりの走りか
てきたと思います。

結果は 100Mと200Mは予選落ち、400Mは
予選を59秒4 準決を58秒8 で通過。

決勝では、57秒6で第3位でした。

インターハイまで あと一週間となった今、最後の調整
に毎日励んでいます。

最初で最後のインターハイですので、悔いのないように
頑張ってきたと思っています。



書道部の年間報告

書道というと競技会などがほとんどないため、年間目
立つ活動はありません。書道部の活動内容はやはり例年
どおり文化祭が中心ですが、昨年一年間の活動報告をし
たいと思います。

まず四月から六月まで色紙の製作。これは文化祭の折
りに展示するものですが、六月にある保護者会にも二ケ

月間の成果を見ていただこうと渡り廊下に展示します。
この期間は一年生が入部したばかりで緊張しているため
かクラブ全体が落ち着いています。

六月半ば位から一年間の活動の主体である画仙紙作品
及び半切作品を製作します。一年生は半切作品を製作し
ますが、初めての経験という人がほとんどで、紙の大き
さや字数の多さに圧倒され手本を見ただけで不安が募っ
てきます。二年生は前年半切作品を製作したので、今年
は画仙紙作品をしますが、まだまだ自信が持てずに手本
を横目に難行苦行です。三年生はこの頃から受験のため
ほとんどの人がクラブに出て来なくなります。受験に
負けず出て来る人は半切又は半切の四分の一の作品を製
作します。これらの作品製作で一番困るのは姿勢です、
なにしろ紙が大きいので床に直接かがみ込まなくては
いけないので、一枚書くだけで腰が痛くなってしまふよ
うな状態ですが、本当に作品を作っているという実感が涌
きます。そして夏休みに入りこれらの作品を仕上げなけ
ればなりません。書き始めた以上は自分で納得するまで
書かないと自己との戦いに負けることとなります。その
ため暑さにも負けず、汗が紙の上に落ちるほどの熱心さ
です。と同時に夏休みが先輩と後輩が最も親になれる
時期です。書道は個人個人の活動のためなかなか先輩と
後輩とは繋がりをもてず、そのために活動はしているが
活発な雰囲気にはなれません。しかし夏休みになると顔
を合わせる機会が多くなるため漸く繋がりがもてるよ
うになります。このように夏休が一番クラブ活動らしく、
活気に満ちています。

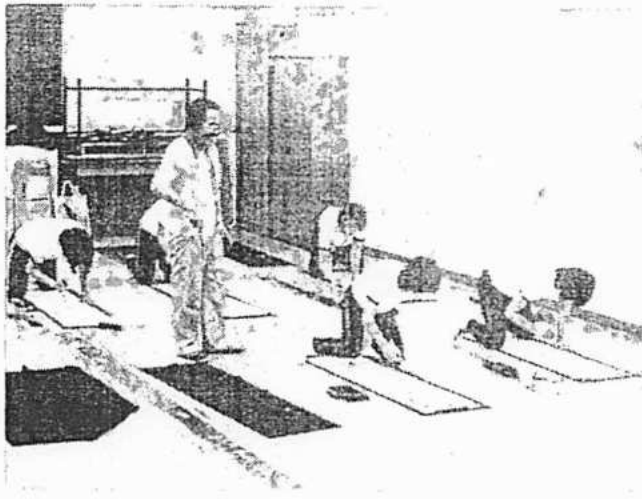
又九月になると、市立博物館で「高校展」という高校
生による芸術関係の展覧会が開かれ、数多くの高校の作
品とともに、我が校も夏休みに一生懸命製作した作品を
展示します。

学校祭が終わってからは仕上がった作品に押す印を作り
ます。これは「篆刻(てんこく)」というもので、三
センチ四方の石に自分の姓名を刻るものですが、これが
また大変な作業で刻ってはいけないところまで刻れてし
まい、字の画数が少ない人はまだよいのですが、多い人
になるとどこから刻っていいのか手のつけようのない人
もいます。このようにして出来上がった印は原形よりど
のぐらい小さくなったものか。しかし仕上がった時の満
足感は経験者しかわかりません。

このようにして1年間がほとんど過ぎ、あまった時間
は来年用の色紙の練習です。

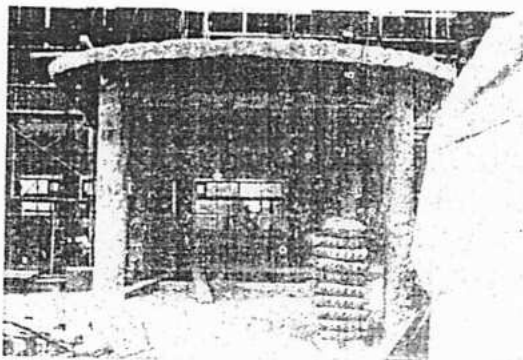
全体を通していえることは部員不足。書道というと堅
苦しく聞こえるためか新入部員はなかなか集まりにくい

のですが、集まった人たちは「書道に興味がある」といった人が多いので、「仲間意識」は持てます。しかし部員が少ないため活動が不十分になってしまうこともあり、今後の書道部の課題としてとにかく部員を増やすことです。



第一棟改修工事

昭和28年 本校の第一期工事として竣工された本館は当時はモデル校舎として容姿を誇っておりました。しかし、竣工後25年の歳月の中で、伊勢湾台風による浸水、公害による空気汚染等の被害によつて老朽化が激しく、昔の面影もなくなつておりましたので、昭和54年度、本格的な大改修が施されました。まだ一度も新しい本館をごらんになつていない方、一度訪れて下さい。



改修中の1棟

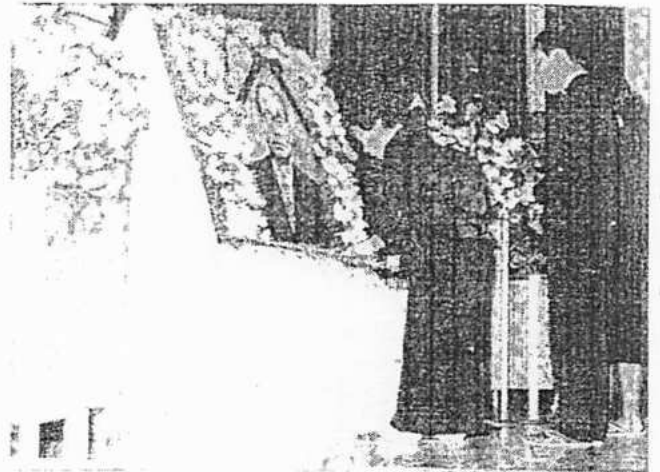
54.1.22



伊藤次雄先生をしのぶ

伊藤次雄先生には、昭和五十二年五月二十三日午前十時二十分、狭心症のため、学校において急逝されました。教頭としての重責をにない、最期の最期まで教育に情熱を傾けられた先生の遺徳を偲びここに慎んで哀悼の意を表します。

合掌



「弔辞」

鈴木 元一

この上なく熱田高校を愛され、熱田高校において、思いがけない最期を迎えられた伊藤次雄先生のご霊前に、熱田高校を代表して、深い悲しみとともに弔辞を申し述べます。

先生は、昭和三十四年四月、創立間もない本校に赴任されました。その年の秋には、かの伊勢湾台風が吹き荒れ、本校も甚大な被害を受けたのですが、その復旧にあたって骨身を惜しまれなかった先生のご努力のほどは、筆舌に尽くし難いものであったと、聞き及んでおります。

爾来十八年余り、先生三十六歳の春より五十五歳の今日まで、人生における充実した時期を、先生は文字通り熱田高校とともに歩んで来られたのです。

その間において、先生はかわることなく信念の人でした。理をたて、筋を通し、ひとたび決断したことを曲げない人でした。この先生の方が熱田高校の大きな支えになっていたことは、関係者一同の広く承知しているところです。

しかし、何よりも先生は、生徒を愛し教育に情熱を傾けた人でした。いかなる激動の時も、われわれの守り愛すべきものは他ならぬ生徒であると見定めて、そこから目を離さない人でした。

先生は親切に生徒を導かれました。この二十一日の土曜日にも、先生は授業後の学校に居残って数学の特別講

義をされ、更にその後で、数名の生徒の質問にいいいに念を押しながら答えておられました。

敬頭として学校運営に力を尽くされた先生のご功績は勿論のこと、われわれや生徒の心に深く刻まれている先生の教師としての見識と情熱に対して、ここに深甚なる敬意と感謝とを捧げます。

先生のご逝去が現実のこととも思われません。先生の熱愛された熱田高校にいつものようにおいでになるのではないかと思えてなりません。

こうなる前に十分に休養をとっていただいたとしたらという思いや、万感こもごもに胸中を去来しております。申し述べたいことは尽きませんが、先生のご冥福を心からお祈りして弔辞といたします。

そのお人柄について……一言

◇少年兵や軍の学校へいっていた仲間や先輩も学校へ帰ってきた。いく人かの先生が去り、新しい先生がきた。伊藤先生との最初の出会いはそんな頃であった。のっばで、声が大きく、ゆうゆうと授業をすすめながら、目尻にしわをよせ、にやーとわらう先生は、すぐ「次さ」という愛称で呼ばれるようになった。

(小川春雄)

◇印象に残っているのは先生の話し方である。話し方というより黙り方である。なかなか口を開かない。普通の人の黙り方を通りこえている。もう話し始めるなど期待していても、まだ口を開かない。その間がものすごく長い。やっと口を開いて「か・と・う」そして数分。・・・いらいらしてくる。そして数分。「わかったかあ」・・・そして数分。・・・「ええかあ」・・・そして数分。「ニャー」と笑う。

(加藤義昭)

◇先生は、他人の犯した失敗について、余り叱られる方ではありませんでした。・・・スキー訓練で、団体乗車券を受けとらずに乗車してしまった失敗を、先生は、「今後気をつければいい。次にどうしたらいいかを考えろ」と、優しく忠告してくれました。

(森本裕康)

◇わずか三ヶ月でしたが、一日での先生と顔をあわせていた時間は最も長い方ではなかったでしょうか。私も出勤は早い方とは思っていましたが必ず先生は既に出勤せられ、遅刻、欠席の生徒からの電話の応待をして居られた姿がいまだに思い出されます。

(加藤哲男)

◇人の偉大さはその人がいなくなった時にはじめて解るものだ。伊藤次雄先生は「次さん」の愛称で誰からも親しまれていた。・・・時々大きな声で叱られることがあったが、不思議に反感を感じない。これが人徳というものだと常に尊敬の念を持ちつつ、少しでも先生にあやかりたいと願望していた。

(安井孝英)

◇「学校でやることは何事も一生懸命やるという純真さ素朴さが大切です」「われわれ教師は、進路といえまざ学校教育の充実を思い・・・」「額に汗する努力からのみ道が開けていく」等々、繰返し力説された伊藤先生の熱情のこもった声が、耳もとに甦ってきます。

(二村鉄男)

◇先生には強固な教育的信念があつて、半日論議しあつても自説を曲げなかったことも再三あり、その信念が紛争にゆれた熱田高校を支え、「今日の熱田高校がある」と断言してよいと思います。

(和久田茂)

◇中間テストのための補習をやられるとのことで、先生はいつものように、「今、何処をやっているやア、教科書と問題集を借してくれ」と言われ、持っていかれた。・・・それから二日後の月曜日の朝、私の机の上に、教科書と問題集がきちんと置かれているのを見ました。

(小島 暢)

◇持ち前の威厳と風格で、皆を圧倒する授業を展開なさっていたことと思われまふ。生徒を愛するお心はよく表われ、お亡くなりすぐ前にも、職員室で二人の生徒を指導なさっていたお姿が印象的です。

(松原 実)

◇先生は、表だってそれと知れるような世話は誰に対してもあまりなさらなかったようですが、人が困ったことにならないように、適切な措置を黙ってしておかれるのが常でした。私も、事が済んでから、先生のご配慮に気づいて、有難く思ったことが何度かあります。先生の一徹さの内面で動いていたものは、こういう優しい心ではなかったかと思ひます。

(山田 浩)



25周年記念会のお知らせ

期 日 昭和55年10月10日(祝) 体育の日
 13:30~14:00 受付
 14:00~16:00 式典・パーティー
 場 所 名古屋国際ホテル ☎961-3111(代)
 会 費 5,000円

当日出席予定の恩師 (敬称略、順不同)

積木 倫一	藤野 源次	安積 正雄	日比野 文一	鈴木 元一	桜井 梅弘	深谷 秀和
小島 俊夫	関戸 武雄	鶴見 浅次	安藤 たづ	加藤 博	北川 伊男	白木 康夫
藤野 義忠	竹田 聡子	三輪 敬一	夫馬鎮太郎	園枝 芳夫	安藤 威夫	中川 史良
近藤 信行	永田 友市	渡辺 寛	広川 保	倉橋 信男	西垣 完彦	篠田 武清
野沢 正紀	中浜 真三	日下 淳一	森 茂夫	宮田 光	浅野 弘	戸松 友次
畑 寛	清水美千子	大野 俊夫	黒崎 勝	石黒 纒雄	平野 勝昭	佐藤 重高
篠原 正志	小野 美世	小室 裕子	沢田 明	鈴木 正子	山田 浩	山中 英夫
市川 次郎	加藤 皓宰	岸本 直哉	堀崎 嘉明	小島 暢	二村 鉄男	日野 博行
伊藤 義美	木村 徹	万前 秀男	森本 裕康	矢田 富美子	今西 英雄	小倉美津夫
加藤 義昭	斎藤 友利	八谷 芳樹	名郷 栄助			

まだ返事はいただいていませんが多数の先生方が出席される予定です。(係)



(世 章)

熱田高等学校後援会

花あり
海あり
和かに朝を
あかねの空を
若人の空を

緑あり
日に日に動く
国土を創り
かほろけん野の
若人の空を

緑あり
十年経て
すこやかに
森詩を
若人の空を

昭和55年8月15日
熱田高等学校
後援会

題 字 名 郷 栄 助 先 生

熱田高等学校同窓会報

発行日 昭和55年8月15日
 発行所 〒456 名古屋市熱田区千代1-17の71
 愛知県立熱田高等学校同窓会
 編集者 会報編集委員会
 印刷所 明治紙業